

# 有ることと成ること —自己自身と同一することと自己自身と差異すること—

## Sein und Werden —S'identifier avec soi et Différer avec soi—

矢 島 忠 夫\*

Tadao YAJIMA\*

### 論文要旨

有ることは、自己自身と同一することである。成ることは、自己自身と差異することである。成ることは、別に成ること、成ることの成ることとして、それ自身において、自己自身の反復、自己自身の累乗、自己自身の肯定である。

成ることは、自己自身で後れることとして、それ自身において、自己に成ること、自己を強めること、自己を超えることである。

キーワード：ニヒリズム、〈力〉への意志、永遠回帰

ニーチェによれば、「ニヒリズム」とは、「生存には意味(目標)がない。生存は何も達成しない。徒勞である。」ということである。それでも、終わりがあれば耐えられる。無意味を終わらせることに意味があるからである。

ニヒリズムの極限形式は、「無意味な生存が永遠に回帰する。」である。これが、ニヒリズムのもっとも恐るべき形式であるのは、無意味な過程にフィナーレがないからである。しかも、それが、無限回、繰り返されるからである。(cf. 『〈力〉への意志』54, 853, 88.1- 秋)<sup>1)</sup>

### 一 生成することだけが自己を反復することができる

「生存すること」(Dasein)、「現存すること」は、「存在すること」(Sein)ではない。「生存」、「現存」は、「存在」ではない。「生存すること」は、「Daに(現に、その時に、そこに)有ること」、「時々有ること」、「有時すること」、「生成すること」である。

「存在」、「存在すること」、「有ること」が、「回帰すること」はありえない。「或るもの」、「存在す

るもの」(Seiendes)、「有るもの」が、「帰って来ること」、「回帰すること」、「繰り返すこと」、「反復すること」はありえない。「存在すること」、「有ること」は、「自己自身と同一すること」、「同じであること」だからである。

そうではなく、「生成すること」、「成ること」だけが、「帰って来ること」、「回帰すること」、「繰り返すこと」、「反復すること」ができるのである。

「生成すること」、「成ること」は、「自己自身と差異すること」、「異なること」だからである。

「自己自身と差異すること」が、それ自身において、「自己自身を反復すること」、「自己自身を累乗すること」なのである。

### 1. 成ることは成ることから別の成ることに成ることである

「成ること」、「生成すること」は、「存在しないものが存在するものに成ること」ではない。生成とは、「無が有に成ること」ではないのである。

「成ること」、「生成すること」は、「存在するものが存在しないものに成ること」でもない。生成とは、「有が無に成ること」ではないのである。

\*弘前大学教育学部社会科学科教室

Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

「成ること」、「生成すること」は、「成ることから成ることではないことに成ること」ではない。

「生成すること」は、「存在することではないことから存在することに成ること」ではないのである。

「成ること」、「生成すること」は、「成ることではないことから成ること」でもない。「生成すること」は、「存在することから存在することではないことに成ること」ではないのである。

そうではなく、「成ること」、「生成すること」は、「成ることから別の成ることに成ること」、「違うこと」、「別に成ること」、「異なること」である。

「成ること」、「生成すること」は、「異成ること」、「異が成ること」である。それは、「事が出来ること」、「出来事が成ること」である。<sup>2)</sup>あるいは、「生起することが成ること」、「出て来ることが成ること」、「出来ることが成ること」(生成すること)である。

したがって、「成ること」、「生成すること」は、「成ることがそれ自身と別に成ること」、「自己自身と異なること」、「自己自身と差異すること」である。あるいは、「自己自身とずれること」、「自己自身に後れること」、「自己自身において後れること」、「自己自身を後ること」なのである。

「成ること」、「生成すること」は、「成ることから別の成ることに成ること」である。だから、「成ること」、「生成すること」は、それ自身において、「成ることの成ること」、「成ることが成ることを反復すること」、「成ることが成ることを累乗すること」である。したがって、成ること、生成することが、成ること、生成することの最小単位、「生成の原子」から成ること、生成することは、ありえないだろう。「自己自身と差異すること」、「自己自身を反復すること」は、それ自身、決して、単一ではありえないからである。

「自己自身と差異することのない成ること」、「成ることを反復しない成ること」は、「成ることのない成ること」、「生成することのない生成すること」である。

## 2. 力がたらくことは力が強まることである

「成ることは成ることから別の成ることに成ることである」ということは、「成ることは力がはたらくことである」ということである。力が「はたらくこと」は、力が「違うこと」、「異なること」、力の「差異」、力の「落差」が生成することだから

である。それは、「力が成ること」、あるいは、「力に成ること」(生成すること)である。

力にとって、「存在していること」、「力が有ること」は、「はたらいていること」である。力が「はたらいていること」は、「力が」成っていること、あるいは、「力に」成っていること(生成している)ことである。したがって、力が、力の最小単位、「力の原子」から成っていることは、ありえないだろう。「自己自身と差異する力」、「自己自身と落差する力」は、それ自身、決して、単一ではありえないからである。

「それ自身において自己自身と差異しない力」、「自己自身と落差することをそれ自身において累乗しない力」は、「はたらかない力」、「力でない力」である。

力は、それ自身において、自己自身を「累乗する」(multiplier)。すなわち、自己自身を多重化、重層化、多様化する。力は、それ自身において、多様体(multiplicité)である。あるいは、つねに、多様(multiple)、ないし、「複数」である。単一の、複合的でない、単数の力、「力の単位」というものは、「はたらかない力」である。したがって、力は、つねに、「累乗された」(multiplié)、「累積された力」である。力を「累乗すること」、「反復すること」は、「強度を高めること」、すなわち、「強めること」である。だから、力は、つねに、「強化された力」、「強められた力」である。力の大きさ、量は、「強さ」、「強度」、「強度的な量」、「内包量」である。あるいは、生成すること、成ることが「それ自身を反復する強さ」、「自己自身を累乗する強さ」が、まさに、「力」なのである。

「自己自身と差異すること」においてのみ、「自己自身を反復すること」、「自己自身を累乗すること」が、生起できるのである。

「自己自身と差異すること」においてのみ、「自己自身を反復すること」が「自己自身を累乗すること」でありうるのである。

## ニ 生成することはそれ自身において自己自身を肯定することである。

ニヒリズムが、現存する世界を誹謗するのは、この世界が、いかなる意味も目標も達成することがない生成の世界だからである。

現存すること、生存すること、生成することは、徒勞である。それは、無意味である。

現存する世界は、完了しない。それは、「未完了である」がゆえに、「不完全」である。

### 1. 生成することが無であることはありえない

生成すること、成ることは、「生成し切ること」、「成り切ること」がない。「生成し切ること」、「成り切ること」は、「生成すること」、「自己自身と差異すること」をやめることだからである。成り切ってしまうことは、「成ることではないことに成り切ること」である。あるいは、「存在すること」に成ること、「自己自身と同一すること」に成ることである。生成することが「完了すること」、「完全に成ること」は、「存在することに成ること」である。それは、「生成というもの」、「生成することというもの」に成ること、ひとつの「存在するもの」に成ることである。

しかし、そんなことには、決して、「成りようがない」のである。

たしかに、現存する世界、生成する世界は、「存在する」ように見える。しかし、それは、「見せかけ」、「仮象」にすぎない。生成することが、「ほんとうに」、「真に」存在することはありえないからである。それは、存在するように「見せかける」だけである。「ほんとうに」、あるいは、「真に」と言われうるのは、「存在すること」だけである。

「ほんとうで有る」、「真で有る」とは、「ほんとうに存在する」、「真に存在する」ということだからである。したがって、「ほんとうに生成する」、「真に生成する」ということは、生成することが、「ほんとうに存在する」、「真に存在する」ということである。しかしながら、「生成すること」は、「存在することではないこと」、「存在することとは違うこと」である。だから、「生成すること」が、「生成するもの」、ひとつの「存在するもの」であることは、ありえないことである。そのように見ることがあるとしても、それは、「見せかけ」である。そう信じることが、時には避けがたいにしても、「誤り」なのである。

\*

こうして、「存在すること」が、「真」、「善」、「美」、「快」、「無垢」、「幸福」として、評価され、「生成すること」が、「偽」、「悪」、「醜」、「苦」、「罪」、「不幸」として、断罪されるのである。そして、これが、現存する世界、生成する世界に関する「ニヒリズム」の意味である。しかし、それ

は、「生成すること」の根底に、「生成するもの」が、あらかじめすでに、捏造されているからではないだろうか。

なぜなら、生成することそれ自身が、「ニヒル」であること、すなわち、「無いもの」、「存在しない或るもの」、「存在しない存在するもの」であることはありえないからである。生成することは、「存在するものの偽せもの」、「偽わりの存在するもの」、「誤って存在するもの」ではありえないのである。

「ほんとうに」存在すること、「真に」存在することは、「完全に」存在することである。「完全に存在する」とは、「生成が完了してしまった」こと、「成り切ってしまった」こと、「もはや生成しない」ことである。だとすれば、「ほんとうに、真に存在すること」、「自己自身と同一すること」は、「生成の外部に存在すること」であるだろう。それは、「時間の外部に」、ないしは、「永遠に存在すること」である。あるいは、起源として、「時間以前」に、目標として、「時間以後」に、存在することである。ところが、生成することは、「それ自身において自己自身と差異すること」である。だから、「生成を終了すること」も、「存在を開始すること」もできないのである。他方、存在することは、「それ自身において自己自身と同一すること」である。だから、「存在を終了すること」も、「生成を開始すること」もできないのである。

「存在し始めること」も、「生成し終わること」も、それ自身、ひとつの「生成すること」である。始まることも、終わることも、生成することのうちのみ生起する出来事だからである。さもなければ、「生成し終わること」、あるいは、「存在し始めること」が、すでに、「存在すること」、「自己自身と同一すること」なのだろう。したがって、唯一度の完了だけで、一切の生成をことごとく麻痺させるに十分であることだろう。

\*

生成は、「生成から生成へ生成すること」である。したがって、生成することに、「始まる」ことはありえない。生成することは、生成することからしか、始まることができないからである。存在することが終わって、「しかる後に」、生成することが始まるわけではないのである。始まること、それ自身が、ひとつの生成すること、「始まりに成ること」に成ることである。生成が始まることは、別の生成が終わること、「別になること」、「別様に生成すること」である。生成することには、「終わ

る」ということもありえない。生成することは、生成することにしか、生成することができないからである。生成することが終わって、「しかる後に」、存在することが始まるわけではないのである。終わること、それ自身が、ひとつの生成すること、「終わりに成ることに成ること」である。生成が終わることは、別の生成が始まること、「別に成ること」、「別様に生成すること」である。

「生成すること」は、「存在しなく成ること」ではない。生成することは、「存在するのではないこと」、「存在することとは違うこと」である。「存在すること」も、「生成しなく成ること」ではない。存在することは、「生成するのではないこと」、「生成することとは違うこと」である。

「生成すること」は、存在することの「否定」、「無で有ること」ではないのである。「無で有ること」は、「無いもので有ること」、「存在しないもので有ること」である。生成が、「無」でありえないのは、それが、いかなる「もの」でもありえないからである。「ものである」とは、「存在するものである」ことである。「或るもの」とは、「有るもの」、「存在するもの」である。

「無」とは、「無いもの」、「存在しないもの」である。だから、それは、「無い有るもの」、「存在しない或るもの」、「存在しない存在するもの」である。したがって、「無」とは、「自己自身を否定する有るもの」、「自己自身を否定する存在するもの」である。「無いこと」、「存在しないこと」は、「存在しないもので有ること」、「自己自身と矛盾すること」なのである。他方、「有」とは、「有るもの」、「存在するもの」である。それは、「無ではない有るもの」、「存在しないものではない存在するもの」、「存在する存在するもの」である。したがって、「有ること」、「存在すること」は、「それ自身において自己自身と同一すること」（同じであること）である。

こうして、「有るもの」、「存在するもの」だけが、すなわち、「自己自身と同一するもの」、「自己で有るもの」だけが、「自己自身を否定すること」、あるいは、「自己自身と矛盾すること」ができるのである。

「有ること」、「存在すること」は、「生成することとは違うこと」、「生成することとは別なこと」である。「もの」、「有るもの」、「存在するもの」は、「生成することとは違うもの」、「自己自身と差異することをしないもの」である。

したがって、「真に存在するもの」、「ほんとうに存在するもの」でありうるのは、「真に」、「ほんとうに自己自身と同一するもの」、すなわち、「実体」、または、「概念」だけだ、ということになるだろう。

他方、「自己を否定すること」、「自己自身と矛盾すること」、あるいは、「存在しないこと」、「偽であること」が致命的になりうるのも、「真に」、「ほんとうに」、「自己自身と同一するもの」、すなわち、「実体」、または、「概念」だけだ、ということになるだろう。

## 2. 生成することそれ自身が存在する？

「存在すること」、「真で有ること」は、つねに、「存在するものが存在すること」である。すなわち、「それ自身において自己自身と同一しているものがそれ自身において自己自身と同一していること」である。

しかしながら、もし、「存在するものと関わりなしに存在すること」、「自己自身と同一するものと関わりなしに自己自身と同一すること」が生じうるとすれば、それは、それ自身が、ひとつの「生成すること」であるだろう。それは、すなわち、「自己自身と差異することにおいてのみ自己自身と同一すること」、「自己自身を反復することにおいてのみ自己自身で有ること」、「自己自身を反復することにおいてのみ自己自身を存在すること」であるだろう。「生成することであるかぎりで存在すること」、「生成することにおいてのみ存在すること」は、「実体と関わりなしに存在すること」、「概念の外部で存在すること」である。

それが、「野生の存在すること」、「野生の<sup>あ</sup>生ること」である。「成ることが<sup>あ</sup>生る」（成っている）こと、「生成が有る」（存在している）<sup>3)</sup> ことである。

\*

したがって、「生成することが存在する」と言っても、それは、「生成すること」が、「存在するもの」として、概念において、肯定されることを意味しないのである。

「生成すること」は、肯定されることも、否定されることもできない。「存在するもの」、「有るもの」、あるいは、「概念」だけが、それが「存在すること」、「有ること」、あるいは、「真で有ること」、「自己自身と同一すること」について、肯定されたり否定されたりすることができるのである。それは、否定によって、「存在しないもの」、「存在す

る存在しないもの、「無いもの」に成るように見えるだろう。しかし、この「成ること」は、「見せかけ」、「幻影」である。「もの」、「自己自身と同一で有るもの」、あるいは、「概念」が、「成ること」、「生成すること」は、ありえないからである。それは、肯定によって、「存在するもの」、「存在する存在するもの」、「有るもの」に、成るように見えるだろう。しかし、この「成ること」も、また、「見せかけ」、「幻影」である。「もの」、「自己自身と同一で有るもの」、あるいは、「概念」が、「成ること」、「生成すること」は、ありえないからである。

したがって、肯定も、否定も、「生成すること」には、かかわらないのである。「肯定すること」は、「有るものが存在すること」を、「断言すること」、「裁決すること」である。「否定すること」は、「有るものが存在すること」を、「否認すること」、「却下すること」である。すなわち、「否定すること」も、「肯定すること」も、「存在するもの」にしか、かかわらないのである。

そして、「生成すること」は、そもそも、「存在するもの」には、かかわらないのである。

「成ること」、「生成すること」は、「別のものに成ること」ではない。それは、「別に成ること」、「別様に成ること」、「別の成り方をすること」である。「生成すること」は、「先行する有るものを否定すること」でも、「後続する有るものを肯定すること」でもありえない。すなわち、生成することによって、存在するものは、たとえわずかにせよ、減少することも増大することもないのである。「個数」とか、「外延的な大きさ」とかが意味をもつのは、「もの」、「自己自身と同一するもの」、「存在するもの」についてだけである。「存在するものの個数」や、「外延的な量」は、生成することには、いっさい、かかわらないのである。

にもかかわらず、「生成を肯定すること」が意味をもつように「見える」とすれば、それは、生成することが、ひとつの「存在するもの」、「生成というもの」に変造されているからである。そして、「生成というもの」が存在しうるように「見える」とすれば、それは、「生成すること」が、「有るものが別の有るものに成ること」に、変造されているからである。こうして、「生成すること」の根底に、「生成するもの」が、捏造されるのである。

「生成することを」、「生成というもの」、「存在するもの」に変造すること、生成することの根底に、「生成するもの」を捏造すること、それが、「概念

すること」である。

しかしながら、「生成すること」、それ自身は、「概念において」、あらためて、「肯定される」必要はないのである。肯定されることができるのは、「存在するもの」として「変造された生成」だけである。

\*

生成することは、それ自身において、「成ることから別の成ることへ成ること」、「成ることの成ること」である。それは、「成ることが自己自身を反復すること」、「自己自身を累乗すること」である。生成することは、それ自身において、「自己自身に回帰すること」、あるいは、そう言いたければ、「自己自身を肯定すること」なのである。

「自己自身と差異することが自己自身を累乗することにおいて自己自身に回帰すること」、そういう仕方では「自己自身と同一すること」、そういう仕方では「自己自身を肯定すること」、それが、「生成が存在する」ということである。それは、生成することが、「存在するものの手前で」、あるいは、「存在するものの彼方で」、「それ自身において」存在することである。

「生成すること」は、「生成することがそれ自身で自己自身を肯定すること」と、したがって、「生成することがそれ自身で存在すること」と、別のことではないのである。

\*

生成すること、生存することの意味を否認するニヒリズムの極限形式は、「生成することが、それ自身において、永遠に、つまり、始まることも、終わることもなく、無限回、自己自身に回帰する」である。しかし、永遠回帰が、ニヒリズムのもっとも恐るべき形式でありうるとすれば、それは、「自己自身に回帰するもの」、「存在するもの」、「自己自身と同一するもの」が、あらかじめ、捏造されているからであろう。

生成することが、それ自身において自己自身を肯定することだとすれば、生成について、その「永遠回帰」を、あらためて「肯定すること」は、余分なことになるだろう。他方、変造された生成、変造された生存だけが、否定されうるとすれば、あらためて肯定される必要があるのも、また、変造された生成、変造された生存だけだ、ということになるだろう。

「自己」、「生成するもの」、あるいは、「自己自身と差異するもの」、「自己自身を累乗するもの」、「自

己自身を肯定するもの」が、あらかじめ存在しているから、「生成すること」、「自己自身と差異すること」が、したがって、「自己自身を累乗すること」、「自己自身を肯定すること」が可能になるのだろうか。そうではなく、「自己自身と差異すること」、「自己自身を累乗すること」、「自己自身を肯定すること」が、それ自身において、「自己が成ること」なのである。したがって、生成が「自己自身を肯定する」ということも、「生成するがままに生成すること」、「成るがままに成ること」、端的に「生成すること」にほかならないのである。

そして、それこそが、「生成がそれ自身において存在する」ということである。

あるいは、この意味で、「有ること」、「存在すること」は、その根源において、「<sup>あ</sup>生ること」(成ること)なのである。<sup>4)</sup>

### 三 生成することはそれ自身において自己自身に後れることである。

#### 1. 生成することはそれ自身において意志を感じている

「<力>への意志」とは、「生成することがそれ自身において自己自身を累乗している」ことの、したがって、「それ自身において自己自身を肯定している」ことの、ひとつの表現である。

ニーチェにとって、「意志というものは存在しない」<sup>5)</sup> はずである。したがって、「すべてのものは<力>を意志する」と言われても、それは、変造された「存在するもの」にかたどった、「比喩的な表現法」(Semiotik)にすぎないことだろう。なぜなら、「<力>への意志」(Wille zur Macht)と言われても、それは、「<力>(Macht)を意志するものがいわば<力>する(力む)(sich mächten)主体として存在している」ことを意味するわけにはいかないからである。

そうではなく、<力>それ自身が、「<力>すること」、「<力>を意志すること」、「自己自身を累乗すること」なのである。<力>(Macht, puissance, power)とは、諸々の「力」(Kraft, force, force)が、それ自身において、「力の差異への衝動」、「力の累積への駆動」としてはたらいっていることである。そのことが、ことさらに、「<力>への意志」として、語られているだけなのだろう。

生成することは、それ自身では、肯定されるこ

とも、否定されることもできない。生成すること、それ自身は、是認されることも、否認されることもできないのである。だとすれば、生成すること、それ自身には、罰をうけるべき罪責も、誉め讃えられるべき功績も、ありえないだろう。生成することには、報いられることも、報いを受けるべき主体も、ありえないだろう。

だから、生成することを、「あらためて意志すること」も、また、意味をもちえない。生成することにおいては、「生成すべきである」とか、「汝、なすべし」と言うことには、意味がないのである。

\*

にもかかわらず、ニーチェは、「より以上の<力>を意志すべきである」と語っているかのようである。道徳の彼岸、善悪の彼方で、なお、「ねばならない」が語られているとすれば、それは、「生成するもの」、あるいは、「<力>するもの」が、したがって、「存在するもの」が、依然として、捏造されているからではないだろうか。

たしかに、人間は、「生成すること」のうちに、「生成するもの」を捏造することなしには、語り通すことができないのだろう。人間は、そのような言語を考案して来なかったのだろう。「それが人間というものの特異体質、人間の限界なのだ」、そう言うこともできるだろう。しかし、それは、ある種の人間、あるタイプの人間の特異体質でもあることだろう。ニーチェのように、「生成というものは生成することの変造である」と語ることができるひとがいるかぎり、そう言わざるをえないだろう。しかしながら、生成することについて語ることは、すでに、「生成することというものは…で有る」と語ることである。したがって、すでに、「生成することというもの」が概念されているのである。「概念することなしに「言語すること」がありえないとすれば、生成することを、「生成」(生成すること)と言う一つの「もの」に変造することが、さらには、生成することの基体として「生成するもの」を捏造することが、究極的には、人間の特異体質であることになるだろう。

それは、人間という「もの」は、「ものが存在する」と「推定する」(解釈する)ことなしには、生きることができなかった、ということである。しかし、人間は、「ものが存在するわけではない」ということを「直観する」、ないしは「感じる」<sup>6)</sup> ことなしに生きることが、できなかったのではないだろうか。そのかぎりでは、人間の諸類型、人間

の諸タイプを考えることにも、意味があるだろう。あるいは、むしろ、ひとりひとりの人間のそのつどの生存を構成している、諸々の力のタイプについて語るべきだろう。

「ものが存在する」と概念しているとき、ひとは、「集団的な」、「一般的な」、「同類と共に有る」生活を、より重視しているだろう。他方、「ものがものする」、「ものが<sup>あ</sup>生る」、「ものが生成する」、「ものが成る」ことを直観している、ないしは感じてとっているとき、ひとは、「特異な」、「ユニークな」、「比類ない」生き方を、より重視しているだろう。だから、わたしたちの言語は、「存在するもの」を概念させるばかりでなく、「生成すること」の直観ないしは感じをも表現しているはずである。しかしながら、言語することが、最終的には、存在するものについて、それが「どのように存在しているのか」を語ることでありとすれば、「ものが存在する」と「想定する」(解釈する)力が、圧倒的に優勢であることも避けられないことである。人間という「生きもの」が言語するその仕方を問題にしているかぎり、この優位が「根源的」であるように見えることも、避けがたいことなのだろう。

そもそも、「特異なもの」、「比類ないもの」、「ユニークなもの」は、存在しない。「もの」、「存在するもの」、「概念されたもの」は、つねに、一般的であるからである。どんな「もの」にも、つねに、同類のもの、似たもの、等しいもの、あるいは、対立するもの、否定するものが存在する。他方、生成することは、「特異なこと」、「比類ないこと」、「ユニークなこと」である。あるいは、いわば「特異すること」、「比類を絶すること」、「ユニークする」ことである。生成することは、「特異に」、「比類なく」、「ユニークに」生起することである。そして、それが、「生成すること」、「自己自身と差異すること」、「存在することとは違うこと」、「自己自身と同一することとは異なること」、あるいは、「概念されることとは違うこと」である。

## 2. 生成することはそれ自身が自己自身を超えていく

「もの」、「存在するもの」、「自己自身と同一するもの」は、反復することができない。反復することができるのは、生成すること、自己自身と差異することだけである。自己自身と差異することな

しには、反復することも、累乗することも、生起することができないからである。

生成することが、自己自身と差異するという仕方、生成することそれ自身と差異しているとき、生成することそれ自身が生起している、すなわち、自己自身を反復すること、自己自身を繰り返すこと、自己自身を累乗することが生起しているのである。

「生成すること」は、それ自身において、「生成することを反復すること」なのである。

あるいは、生成することは、「自己自身と差異すること」として、「自己自身と<sup>ず</sup>れること」、「自己自身において<sup>ぶ</sup>れること」である。それは、「自己自身において<sup>後</sup>れること」、「自己自身で<sup>後</sup>れること」、「自己自身を<sup>お</sup>く<sup>る</sup>こと」<sup>7)</sup>である。

(1)生成することが、「自己自身で<sup>後</sup>れること」として、生成することそれ自身と差異しているとき、「自己自身において(an-sich, en-soi, in-itself)自己自身を反復すること」が、したがって、「自己自身において自己自身を累乗すること」が、生成している。

この「即自的に反復すること」、「即自的に累乗すること」が、「現在することとして自己自身を反復すること」、「現在することとして自己自身を累乗すること」である。

あるいは、「自己自身において自己自身を反復すること」、「自己自身を累乗すること」は、「自己自身の強度を高めること」として、それ自身ですでに、「自己が成ること」、「自己が生成すること」、「自己になること」である。即自的反復、即自的累乗は、それ自身ですでに、「<sup>からだ</sup>身体が成ること」、「<sup>からだ</sup>身体が生成すること」、「<sup>からだ</sup>身体に成ること」、あるいは、「<sup>いのち</sup>生命が成ること」、「<sup>いのち</sup>生命が生成すること」、「<sup>いのち</sup>生命に成ること」である。

それは、自己自身に「自己を贈ること」、「身体を贈ること」、「生命を贈ること」である。

(2)生成することが、「自己自身で<sup>後</sup>れること」として、生成することそれ自身と差異しているとき、「自己自身に向かって(für-sich, pour-soi, for-itself)自己自身を反復すること」が、したがって、「自己自身に向かって自己自身を累乗すること」が、生成している。

この「対自的に反復すること」、「対自的に累乗すること」が、「既在することとして自己自身を反

復すること」、「既在することとして自己自身を累乗すること」である。

あるいは、「自己自身に向かって自己自身を反復すること」、「自己自身を累乗すること」は、すぐれた意味で、あるいは、より強められた強度において、「自己が成ること」、「自己が生成すること」、「自己に成ること」である。対自的反復、対自的累乗は、より強められた強度において、「身体が成ること」、「身体が生成すること」、「身体に成ること」、あるいは、「生命が成ること」、「生命が生成すること」、「生命に成ること」である。

これが、すぐれた意味で、あるいは、きわだった意味で、「自己が回帰すること」、「自己へ帰ること」、「自己を取りもどすこと」である。

それは、自己自身が「自己を迎えること」、「身体を迎えること」、「生命を迎えること」である。

そして、それが、「自己を累乗すること」、「自己を強めること」である。

(3)生成することが、「自己自身が後れること」として、生成することそれ自身と差異しているとき、「自己自身を超えて(über-sich, sur-soi, super-itself)自己自身を反復すること」が、したがって、「自己自身を超えて自己自身を累乗すること」が、生成している。

この「超自的に反復すること」、「超自的に累乗すること」が、「到来することとして自己自身を反復すること」、「到来することとして自己自身を累乗すること」である。

あるいは、「自己自身を超えて自己自身を反復すること」、「自己自身を累乗すること」は、「別の自己が成ること」、「別の自己が生成すること」、「別の自己に成ること」である。超自的反復、超自的累乗は、「別の身体が成ること」、「別の身体が生成すること」、「別の身体に成ること」、あるいは、「別の生命が成ること」、「別の生命が生成すること」、「別の生命に成ること」である。

これが、「自己の限度を超えて強度を高めること」、「自己を超えること」、「自己を解体すること」である。

それは、自己自身で「自己を送ること」、「身体を送ること」、「生命を送ること」である。

それが、すぐれた意味で、あるいは、きわだった意味で、「行動すること」、「能動すること」である。

生成することは、自己自身が、自己自身で、自己自身に後れることである。

## 注

1) F. ニーチェ『権力への意志』原佑訳、ニーチェ全集第11巻、理想社、1974.

Friedrich Nietzsche, *Aus dem Nachlass der Achtzigerjahre*, Werke in sechs Banden, Cahr Hanser Verlag, Band VI, 1980.

「私たちはこの思想をその最も怖るべき形式で考えてみよう。すなわち、意味や目標はないが、しかし無のうちへの一つの終局をもたずに不可避免的に回帰しつつあるところの、あるがままの生存、すなわちく永遠回帰。」

これがニヒリズムの極限的形式である、すなわち、無(「無意味なもの」)が永遠に！(62頁, S. 853)

2) 矢島忠夫「時間と出来事」弘前大学教育学部紀要第79号、1998.

「<事>は、それ自身が、すでに、<事が成る>こと、<事>が成立することである。<異>は、それ自身がすでに、<異なる>こと、<異が成る>こと、<異が成立する>ことである。」「こうして、<事が-成る>ことは、<異が-成る>ことである。」(25頁)

3) G. ドゥルーズ『ニーチェと哲学』足立和浩訳、国文社、1974.

Gilles Deleuze, *Nietzsche et la Philosophie* PUF, 1962.

「純粋な生成という思想は、どのように永遠回帰を基礎づけるのであろうか。生成から区別され、それと対立するような存在を信じなくなるには、この思想だけで十分である。しかし、また、生成そのものの存在を信ずるにも、この思想だけで十分である。生成するものの存在とは、生成し始めもせず、生成し終えもせぬものの存在とは、どのようなものであろうか。回帰すること、これが生成の存在である。」(76頁, P. 54)

G. ドゥルーズ『ニーチェ』湯浅博雄訳、ちくま学芸文庫、1998.

Gilles Deleuze, *Nietzsche*, PUF, 1965.

「生成はもはや<存在>の管轄に服すことはない。」「<存在>や<一なるもの>は単にそれらの意味を失うというのではなく・・・ある新しい意味を持つことになる。」「<存在>とは、生成としての生成についてそう言われるのである。」「回帰することは、まさしく生成の存在であり」「<同一なもの>(le Même)は回帰しない。ただ回帰することのみが、生成しているもの<同一なこと>(le Même)なのである。」(63-4頁, P. 36)

問題は、「生成するもの」とか、「有る」と言う表現そのものに潜んでいる思想,ある意味で「自然な存在論」と向かいあうことである。

「生る」は、「生まれる。あらわれ出る。」(『時代別国語大辞典 上代編』三省堂 1970.59頁)である。「生る」が、「生る」(生じる。出て来る。)に通じることについては、『大辞典』平凡社1974.(154頁, 3075頁)を参照。

- 4) 実川敏夫『メルロ＝ポンティ 超越の根源相』創文社 2000.

「諸瞬間は<他から己れを差異化する(se différencient)のである>」「志向がもたらす同一性は、差異を排除する同一性、差異性から乖離した同一性ではない。<超越とは、差異性における同一性(l'identité dans la différence)である>」「こうした同一性こそは、同一なるものとしての“存在”を定義するのだからなければならない。即ち、それは“存在”の新たな定義を、つまり新たな存在論を、含意するのである。」「現象学は、メルロ＝ポンティにとって、それ自身いわば存在論的革命なのである。」(195-7頁)

- 5) F. ニーチェ『権力への意志』全集第12巻。

Friedrich Nietzsche, *Aus dem Nachlass der Achtzigerjahre*, Band VI.

「論理的・形而上学的要請、すなわち、実体、偶有性、属性などによせる信仰は、その説得力を、私たちの働かすすべてを私たちの意志の帰結とみなす習慣のうちにもっている、一そのため自我は、実体として、多種多様の変化のうちで消え去ることがないのである。一しかし、意志なるものはなんらない。」(488,28頁,S.536-7,87年春一秋)

- 6) 矢島忠夫[1998]

「<自己自身と異なる>とは、<それ自身において>、<それ自身によって異なる>こと、<おのずから異なること>である。それは、<自己自身を異ならせる>こと、<自己自身を変動させる>(s'affecter)こと、すなわち、<自己自身を触発する>こと、<自己自身に触発される>(s'affecter)ことである。それは、<感動する>(s'affecter)こと、いわば<感情する>(s'affecter)ことである。」(28頁)あるいは、「身にこたえること」、「身にしみること」、「身になっていること」

である。

- 7) 矢島忠夫[1998]

「身体が、<自己の内部から触発される>ことができるのは、<触発する自己>が<触発する自己>と<異なる>からである。身体が、<自己に触発される>ことができるのは、それが、<自己と異なる>(différer avec soi)こと、<自己に遅れる>こと、<自己を延期する>(se différer)こと、<自己とずれる>ことにおいて、はじめて、<自己と成る>からである。身体は、自己として<生成する>ことによって、はじめて、<自己>である。

<自己触発する>(s'affecter)ことは、<感動する>こと、<感情する>ことである。<感情>(affection)は、それ自身で<時間的な>出来事、<時間のかかる>出来事である。それは、<持続する>出来事、<長引く>出来事、<後を引く>出来事である。」(28-9頁)

「後れる」こと、「後に残される」こと、「後になる」こと、「後ろになる」ことは、同時に、「送る」こと、あるいは、「後る」ことである。

それまで、何気なし当たり前のように同じ律動同じ向きで歩んで来た二人、ある日突然、一人は、関のあちらに進むことを止められ、一人は、関のこちらに残ることを許されない、そんなとき、「きみはなおいき、われはとどまる」、「われはなおいき、きみはとどまる」、二人を「引き裂き」、「引き止める」、その「後れ」、その「へだたり」の感覚が、ひとがひとを「送り」、ひとがひとに「送られる」言葉に、哀惜と祈念の響きを与えるのだろう。

そして、そのようにしてまた、ひとは、「時に後られ」、「時に後れ」、「時を後る」のである。あるいは、また、「自己に後られ」、「自己に後れ」、「自己を後る」のである。

ひとは、送られることによって、はじめて、ひとりの自己、ひとりの他者と成る。ひとを「送る」ことは、そのひとに、そのひとの自己を「贈る」ことである。

「後る」が、「何かを放ちやる」ことを意味する「送る」、あるいは、「贈る」と同源であることについては、『時代別国語大辞典 上代編』(146頁)を参照。「後る」については、『大辞典』(654頁)。